

(第一課題)

コパカバナ地区で働く人々の住宅と職場の関係

九州大学大学院 土生 珠里*

研究方針

ポルトガル植民地・港町として、また帝国・連邦首都としての歴史を持ち、防衛拠点としての都市建設から帝国首都として都市インフラが整えられ、20世紀前半に連邦首都として大規模な再開発があり、1960年にブラジリアの首都移転から経済・流通・文化そして観光地として歴史の流れを刻んでいるリオ・デ・シャネイロは地勢による自然区画(パイホ)が明確で、それぞれの区画に住む住民の意識・行動範囲・商業圏の選択・所得・階層意識は独特である。区画の大きなまとまりとして、特にノルテ(北部)とスウ(南部)では所得による階級の差が目立ち、上流階級に属する条件の一つとして個人の外見の見た目の良さが上げられ、特にスポーツの評価が高く、海岸沿いに設けられたジム設備や歩道での運動という面で海岸近くに住むことの価値は高い。代表的なコパカバナ地区には、上流階層が居住し、奴隷制度からの歴史を背負った階級性の仕事一般家庭内で未熟練労働者により行われている。

リオ・デ・ジャネイロから1960年にブラジリアへの首都移転は多額負債と政治困難を招き、4年後には軍事クーデターが起きる要因ともなった。1964年から始まる長期軍事政権下で国家プロジェクトとして防衛・流通のために広大な国土を南北に縦断する国道等の整備・普及が図られ、その結果地方住民が容易に都市へと移住できるようになった。とりわけエルニーニョ現象により貧しい地域を襲う干ばつや洪水で仕事と生活の場を求める貧困層の多くが都市へ移住した。彼らの多くは地価や家賃の安い都心から離れた居住区に住み、朝早くに家を出てバスや鉄道などで都心・中・上流階級宅の職場へ時間をかけて通勤している。

リオデジャネイロ市はその地勢から住宅の高層化が進み、特に海岸地帯においては人口が密集している。コパカバナ地区においては、平日及び週末、昼・夜問わずに人の流れがあり、交通アクセスの良好さ及びその他地域への通過地点としての魅力を備え、企業にとって利益及び競争性の高い地域であり、就業可能性が高いことから、都市インフラ整備及びエネルギー需要面からは生産性のある地域である。

反面ブラジリアにおいては、生活と仕事の区画が明確に整理され、人口の密集は平日・祝日・週末・時間帯によりどちらかの区画に偏る。公務員人口が高く、平日においては生活から就業の場への交通渋滞が頻繁であり、週末・祝日においては都心地区での人口は極端に減少する。都市を維持するインフラ面では、就業時間帯のみ需要があり、時間外及び祝日・週末においては都市整備のすべてが生産性のないエネルギーを消費している。一極集中された地区における投資額は高く、また維持管理するコストも稼働時間・生産面から言えば非常に高額なものとなっている。

ブラジリアの現象は、魅力を失った都心部を持つ都市に見られ、また同じように区画整理され人口の流動が計画された地域に起りうる。わが国においてはつくば研究学園都市において、交通・人口流動・生活の場としての都市の生産性・持続性を問うことが異なった背景を持つブラジルの一都市と比較考察することが可能ではないかと考える。

本研究において都市環境における住宅と職場の相互関係から、人口・建物の集中及び区画・土地利用を考察し、流動性と生産性について調査を行い、今後の都市計画の一つの課題として考究する。

* はぶ じゅり(九州大学大学院人間環境学研課空間システム)